

開催報告

春学期FDプログラム

「授業における生成AIの活用と課題 ―明日からの授業でなにに気をつければいい?」

[2025年7月14日]

大学教育開発・支援センターでは、生成AIの急速な発展と普及を受け、大学の授業における生成AIの活用方法や、学生への指示の在り方について理解を深めることを目的に、春学期FDプログラム「授業における生成AIの活用と課題 ―明日からの授業でなにに気をつければいい?」をオンライン開催しました。講師には、教育学、教師教育学を専門とされ、大学での授業における生成AI利用に関する研究に取り組んでおられる根岸千悠先生（京都外国語大学共通教育機構講師）をお招きしました。当日は78名の教職員の方々にご参加いただきました。

プログラムの冒頭では、当センター助教より、参加申込みをしてくださった方を対象に実施した「授業における生成AIの利活用」に関するアンケート結果を報告しました。本学教員の授業や業務における生成AIの活用状況、学生の生成AI利用に関して抱えている課題が共有され、参加者同士がそれぞれの状況や経験を知り合う機会となりました。



根岸 千悠先生

続いて行われた根岸先生の講演では、シラバス・チェックの自動化、Napkin AIによるテキストデータからの図解作成、NotebookLMでの教材の音声解説の作成など、授業準備において生成AIを活用する事例が豊富に紹介されました。また、学生が授業内での生成AIの利用に関するルール(3か条)を自分たちで策定する活動、提示された画像に最も近い画像を出力できるプロンプト作成のアイスブレイク等、授業内で学生が生成AIの使い方を考える実践例が示されました。

特に、学生自身がAIによって出力された「推し」に関する説明を批判的に検討することで、生成された内容を評価するには既存の知識や経験が必要であることを伝える、という事例は参加者に好評でした。

講演の後半には、アンケート結果を踏まえて設定されたケースに基づき、参加者同士が意見を出し合うインタラクティブなセッションが設けられました。オンラインボ-



▲参加者間の意見交換の様子

ードのPadletには参加者からの意見が集約され、生成AIの利用程度に応じた課題設定の方法や、学生への生成AI利用に関する指示について自らの経験を共有しあい、互いに学び合うことができました。

まとめとして、文章以外の成果物を重視すること、AIアセスメント・スケールを活用しシラバスや初回オリエンテーションで早めに生成AI利用の方針を提示すること等、課題設計や指導のヒントが示されました。また、生成AIの利用が人間の知的活動に与える影響についての最新の研究結果も共有されました。終了後のアンケートでは、「紹介された事例を授業で実践してみたい」という声が多く寄せられました。

生成AIの進化と普及は今後も加速していくと考えられ、大学における教育や学修への影響もより一層大きくなっていくと予想されます。本プログラムを通じ、学生の学びにつながる生成AIの活用方法や向き合い方についての知見とノウハウを蓄積し、発信していくことの重要性を改めて認識しました。

最後に、ご登壇いただいた根岸先生、ご参加いただいた皆様に改めて御礼申し上げます。

助教 豊田英嗣

次ページ 学生座談会「変容する学修環境と立教生の学び」

当センターからのお知らせ<本学教職員向け>

■【動画視聴申込フォーム】春学期FDプログラム「授業における生成AIの活用と課題 ―明日からの授業でなにに気をつければいい?」

下記フォームからお申込みいただいた方に、上記春学期FDプログラムの動画リンクをお知らせします(本学教職員限定)。

<https://s.rikkyo.ac.jp/xavzyccb>

●「生成系をはじめとするAIの利活用に関する情報」サイト

本学V-Campus IDを通じて利用可能な生成系AIサービスの種類、著作権等AI利用にあたっての留意点をはじめ、AIの教育利用を検討するうえで参照できる情報を紹介しています(本学教職員限定)。ぜひご利用ください。

<https://s.rikkyo.ac.jp/7sbk3a2w>



現在の大学生は、高校時代に新型コロナウイルスによる行動制限の影響を大きく受け、その後、オンライン授業、ICTツールの普及、生成系をはじめとするAI(以下、生成AI)の登場、さらには就職活動の早期化など、大学の学修環境が大きく変化する中で、学生生活を送ってきた世代です。それでは立教生は、どのような学びの経験を積み、大学での学びをどのように捉えているのでしょうか。学士課程の4名の学生にお集まりいただき、変容する学修環境と学びをテーマに座談会を実施しました。

参加学生

法学部国際ビジネス法学科3年 Tさん

文学部史学科4年 Sさん

理学部物理学4年 Iさん

コミュニティ福祉学部スポーツウエルネス学科4年 Yさん

聞き手

大学教育開発・支援センター助教 名倉早都季・豊田英嗣

— 高校時代の学修環境と、大学での学びへの期待

名倉：みなさんは高校生のとき、新型コロナウイルスによる行動制限を特に強く受けた世代だと思います。高校ではオンライン授業を受けましたか。また、ICTツール(PCやタブレット等接続機器を通じて使用するツールやアプリ全般)はどのくらい利用していましたか。

コミ福4年：オンライン授業としては遠隔でライブ配信を受講したことがあり、ツールはロイロノートを使っていました。

文4年：Zoom、Teamsなどのウェブミーティングツールで授業を受けたことがあります。例えば英語の授業では2人ずつブレイクアウトルームを作り、ロイロノートでグループワークをした経験があります。



法3年：オンライン授業の経験は高校では全くありませんでした。感染症が理由で学校に通学できないときは、自宅での学習用に、このワークのこの範囲を終えておくようにという指示がありました。また、Google Classroomが導入されており、例えば数学の問題など分からないところがあれば、先生に質問ができる体制でした。

豊田：それでは、みなさんは高校生のときに、大学に入学してからの学びに対して、具体的な期待はありましたか。

法3年：漠然とですが、大学は自由なイメージがあり、グループワーク等を通じて、必ずしも一つの正解が与えられるわけではない問題を考えていくのかなと思っていました。高校でもグループワークはありましたが、例えば数学の問題についてグループで考えるときには、一つの正しい解を見つけることが主な目的でした。正しい答えを言わないとワークが前に進まない、議論にもなりようがない部分があり、答えを見つけていく面白みは、当時はあまり感じられませんでした。

文4年：立教池袋高校の出身なので、少し環境が周りの学生とは異なっていたかもしれません。高校3年生になると、週10時間ほど自由に選択できる科目があり、その中で立教大学の開講科目を履修することができました。このため、大学での学びに対する解像度はある程度高かったです。そのうえで期待していたのは、大学に入ったら、答えが複数あるか、あるいは答えがない疑問に対して向かっていく学びができるのかなということです。高校での勉強は、答えありきの、一つの解答からそれに向かう道筋を辿っていく登山型の勉強なのではないかと思っています。それに対して大学での学びは、答えが複数あるか、あるいは答えがない疑問に対して降りていくような、いわば下山型の学びというイメージがありました。

理4年：大学への学びに対する期待といえるかはわかりませんが、高校でイメージしていた大学の学びと、大学に入ってからそれは違いました。高校の物理は答えが出る問題を解くことでしたが、大学では答えが出ないとされている問題に対しても、

少しでも答えに近づくアプローチがないかを探すことを考えなくてはならない。高校の勉強の単純な延長ではなかった、というところです。

名倉：大学に入学してから、学び方を身に付けるまでに、時間は掛かりましたか。

理4年：多少難しい部分もありました。でも、大学の1、2年生である程度答えが決まっている問題に取り組み、さらに学年が進んでから、いわゆる大学の学びらしい答えのない難しい内容を学ぶというカリキュラムになっていたため、適応はしやすかったです。

—就活の早期化に起因する学びへの葛藤

名倉：高校時代に抱いていた大学での学びに対する期待を100%とすると、実際に大学入学してからこれまで、何%が満たされていると感じていますか。50%より下の方から伺います。

文4年：授業や先生方からの指導にはとても満足しています。一方で就職活動を中心に、学びに集中する環境を作れなかったことが50%未満の大きな理由です。社会が教育をあまり後押ししてくれていないと感じます。というのも、大学では1、2年生で基礎を固め、3年生から、先ほどの話でも出ていた大学での学びに対する期待に資するような専門分野の教育が始まると思うのです。しかし、今、文系だと就活は3年生の春から始まり、4年生の夏頃まで続くスケジュールとなっていて、まさに専門教育の大事な期間と重なってしまっています。例えば、私が所属する学科では、3年生の終わりに1万2千字程度の論文を提出する科目があります。しかし、3年生の冬はまさに就活の本選考の時期です。提出した論文に対しては、良い評価をいただくことができたが、提出時期があと半年後であれば、もっと色々できたのと思います。期待していた大学での学びから質が下がってしまった感覚はあります。

コミ福4年：私は80%くらいです。明確な目的があって大学に入ったわけではなく、筋トレが好きだから、スポーツウエルネス学科にという漠然とした進学でした。そのため、具体的な期待はあまり持っていませんでした。実際に入学してから、生理学や解剖学を体系的に学ぶことができ、興味があった分野への解像度が上がりました。期待に対する残りの20%はこれから取り組む卒論の研究次第です。

法3年：私は70%くらいだと感じています。ゼミの先生が「なぜを大切にしろ」といつも仰っていたことが印象的です。生成AIが発達して、知りたいことに対する答えはすぐに出てくる中で、その答えをいったん疑って考えること、他の選択肢はないか可能性を広げていくことを教えてくださいました。正解とされているものが本当に正しいのかを考える力は、大学で身に付いた

部分だと思います。30%の満たされない部分は、私も、就活が早期化していく中で学ぶ時間が短くなっていることです。短い時間で質を高めるための方法を考えてみたところ、もっと授業選びのミスマッチを減らせれば効率よく学べると思いました。法学部だと学問分野の特性もあるのか、事前に把握できる授業内容は漠然としていて、自分の興味本位でまず履修登録して、あとからちょっと違ったということがよくありました。私はビジネスモデルを提案するプロジェクトベースの授業を履修してから関心がはつきりしてきました。例えば、1年次で法学を扱う実務家の方と共同でプロジェクトに取り組むような機会があれば、もう少し早い段階で、自分の関心と授業のマッチングができると思いました。

理4年：私は80%くらいです。専門のカリキュラムは満足しており、残りの20%は語学、英語についてです。理学部だと、実際に英語を使う場面は主に論文を読むことですが、授業の英語はディスカッションが中心です。自分が使いたい英語と、大学で学ぶ英語にギャップがありました。英語で論文を読むトレーニングを授業で積めるような設計だったら、もう少し満足度が高かったかもしれません。



—生成AIは学びを効率化した？

豊田：皆さんが大学に入学された時には、授業で様々なICTツールが活用されていたと思います。そして、在学中に生成AIも登場しました。授業・ゼミ・卒論指導の中で、ICTツールの使い方や、生成AIに関する教員からの指示などで印象に残っているものはありますか。

文4年：Google Formのような投票系のツールを使って、大教室内で回答を可視化しながら進める授業がありました。「この哲学者を知っていますか？」といった簡単な質問だったと思いますが、リアルタイムで集計して、授業に出席している他の学生の回答の様子も知れたのが良かったです。

コミ福4年：生成AIについては、私の所属するゼミでは、技術にキャッチアップしていかないと置いていかれるという前提にたち、うまく使おうという方針がとられているので、使用することが当たり前になっています。実際に使ってみると、プロンプトに自分の思考をかなり詳細に書くことで、AIが自分の考えを拡張してくれる。自分の思考の延長、知の拡張という感覚で使っています。もちろん、AIの留意点も教えていただいております。最後に自分で情報をチェックして見極める必要があるという点は押さえたうえで使っています。

名倉：プロンプトの書き方や技術に関する知識は独学ですか。また、生成 AI を使うようになって、できるようになったことなど効果はありましたか。

コミ福 4 年：先生が教えてくれることもありますし、インターネットに結構、情報があります。また、ゼミ内の Slack で AI に関する最新情報の共有もしています。それらの情報を参考にしながら、生成 AI を実際に使う中で知識を身に付けていきました。例えば解像度が上がるので、自分で実際に書いて使ったというトライアンドエラーを繰り返し、具体的にどう使えるのかを学ぶという勉強の仕方でした。AI を使うようになってから、学ぶスピードが加速しました。データサイエンス系の研究をしているので、大学からプログラミングを勉強し始めましたが、その勉強に AI を使っています。AI を使う前は、エラーが出たら一つずつエラーを検索して記事を読んで解決していましたが、それをする必要がなくなりました。エラーを貼れば生成 AI が、コードのどこが原因でどこをどう修正すればいいかを一瞬で提案してくれるので、ものすごい時間短縮になります。

法 3 年：私が印象に残っているのは、ChatPDF を利用した英語の授業です。ChatPDF は、PDF を読み込ませると要約や、読み込ませた内容に関する出力をしてくれるツールです。授業では、ペアのグループワークで ChatPDF に英語の要約をさせ、分からない箇所があれば ChatPDF に質問をして理解を深め、最後に内容についてペアで発表をしました。グループワーク自体は他の英語の授業でもよくありますが、生成 AI を使わないときは正直、よく分からない箇所も曖昧にしたまま発表していることがありました。ChatPDF を使うことで自分の中での理解を一度固めてから他者に共有することができましたし、ペアの相手が自分とは違う新しい視点で質問を投げ掛けてくれるので、理解も 2 倍になって、授業の満足感が増しました。

名倉：生成 AI を使うことによって、本来身に付くべきことが失われている感覚はありますか。

法 3 年：時間が短縮されたメリットのほうが大きいです。自分だけの力では一つの問題に悩んで止まっている時間が長かったところを、生成 AI に聞けば一つ一つの分からない問題をすぐ解決できる。全体的に見たとき、学んでいる量は AI を使った場合のほうが多く、学びが促進されているように思います。

コミ福 4 年：私もそう思います。プログラミングを勉強するにも、実際には生成 AI だけに頼っているわけではなく、ネットで調



べたり本を読んだりするので、学習の効果を倍増させている、という感覚があります。

名倉：分からないものが沢山あるとそこで学ぶことを諦めてしまふけれど、生成 AI が解決してくれるから次のステップに進める、ということでしょうか。

コミ福 4 年：はい。結局のところ複雑な問題については、自分が何を分かっているのかが分からないと生成 AI に対しても質問はできません。

文 4 年：私もたまに生成 AI を使っています。何らかの事柄について背景情報を知りたいときや文章校正をしてほしいときにはとても便利です。けれども AI を使うと、学習の精度が落ちる感覚はあります。例えば英語を精読する力、文章の推敲能力などは身に付きづらい、あるいは落ちている気がして、最近は意識的に使わないこともあります。おそらく、AI を使うからこそ得られる学習機会と、使わないからこそ得られる学習機会と、両方あって。ベストミックスができれば理想的だと思います。

理 4 年：私の所属学科では、教科書を手に先生が黒板に書く形式がメインなので、生成 AI をはじめツール類はあまり使っていません。例えば自習の中で、大学の教科書の問題の解説が簡素なとき、対話の相手として生成 AI を使うことはあります。でも、教科書を使って友達と議論するのも好きで、学習効果は高いとも思っています。うまく融合するのがベストだと思います。

豊田：授業外では、ツールとして何を、どのように使っていますか。

コミ福 4 年：もっぱら生成 AI を。Chat GPT だけではなく、Gemini、Claude、検索には Perplexity を使っています。調査に Deep Research、文献管理やタスク管理で Notion、情報の整理に Miro を使うこともあります。また、生成 AI についてはタスクによって、モデルを使い分けています。コーディングでは最近出た GPT-4.1 (※ 2025 年 6 月時点) を、高度な推論を必要とするタスクでは GPT-o3、日常的なものは GPT-4o という具合です。モデルによって、得意なことと不得意なことがあるので、モデルの使い分けが大事だと思っています。

法 3 年：課題に取り組むときに生成 AI を使っています。分からない部分について一つのツールに頼るのではなく、複数の AI に聞き、俯瞰で捉えるようにしています。

文 4 年：生成 AI に資格試験の目標点数を伝え、スケジュールを立ててもらうことがあります。適宜、自分の頭で考えて、自分が本当にすべき勉強を精査する必要はありますが、アイデマンとしてはとても優秀です。アイデアを出してもらって、自分で選ぶという組み合わせです。就活にもかなり活用できます。



エントリーシートの推敲、グループディスカッション、フェルミ推定の問題演習、ケース面接のロールプレイングなどです。

名倉：質問回答、調べもの、ブレインストーミング、文章の推敲あたりに AI を活用しているということころでしょうか。要約で活用しているという方はいますか。

コミ福4年：論文を読むときは、生成 AI に要約させたいので、本文に目を通すかたちをとっています。論文の収集にも AI を使っています。PubMed（※データベース）から論文を自動で何十本かを収集するコードを生成 AI に作ってもらい、ボタン1つで取得する。次に DeepL の API を使ってタイトルの翻訳を一気にして、30本くらいをまとめて確認するという使い方です。

法3年：法学のテスト勉強で、判例が長くて、どうしても読む気にならないときは、Chat GPT に投げて要約してもらって、勉強しています。先ほどの話に関連しますが、就活が早期化されている影響で、いかに早く単位を効率的に取るかが、学生の中ではメインになっているところがあるように思います。そうした状況の中で、生成 AI を使って、日々の勉強を効率化させていく、効率化せざるを得なくなっている。就活早期化と AI の便利さが相まって、結果として学びの質が落ちているという流れがあるのかな、と感じています。

文4年：私は要約には使わないようにしています。論文に付いている要約か、短い論文であれば本文を読むようにしています。ただし、外国語の論文を読むときは、自分の訳が間違っている可能性もあるので、DeepL を使っています。

理4年：あまり生成 AI を読むことには使っていません。教科書を読むときも、きちんと式が追えるかは、手を動かして計算しないと、やはり自分のものになりません。私は大学院に進学を希望しており、就活はないので、他の学生よりも時間が取れるということもあります。AI よりも先生の方が確実な情報を教えてくださいるので、本当に困ったら先生に聞くようにしています。

名倉：逆に、授業でも自分の勉強の中でも、使いづらかった、あるいは使わないツールはありますか。

文4年：個別のツールではないのですが、プラットフォームが一本化されたらうれしいです。1人の先生が、複数のプラットフォーム、例えば、立教時間、Canvas LMS を併用することがあるのですが、できれば一つの科目では一つのプラットフォームにして欲しいことと、可能であれば大学全体で統一してもらえるとありがたいです。



一同：それは周りの学生もみんな希望しています（笑）

—大学での学びとは

名倉：最後に、大学での学びと高校の学びを比べ、それぞれにキーワードを付けるとしたら、どんな違いがあると思いますか。

コミ福4年：学び方についていえば、受動と能動です。高校はカリキュラムがしっかりあって、学校が大体全てを提供してくれる。それに対して、大学は自分で授業を決めて、自分で学びに行くという違いがありました。大学では自由度が上がるので、自分が何もしなかったら何も身に付かないという環境だと思います。けれども、いろいろな支援はすでに用意されているので、自分で情報を集めて、それを実際に使うかどうか大切だと思います。

文4年：最初に話した登山と下山もそうですし、あとは戦術と戦略という言葉で表せると思います。高校までは、この教科をどうやって勉強するか、この問題をどう解くかという戦術的な要素が強いと感じています。例えば数学であれば、この微分

積分の分からないところを、どうやったら分かるようにできるかが壁になることが多いと思います。それに対して、大学では4年間を使ってどんな学びをして、どんな人間になって、どんな進路を描きたいのかというような、その戦略の部分が大事になる感覚があります。目的を達成するためにはこの授業で何を習得するのかという、目標設定を自分でするところから始まる、というイメージです。はじめはその違いに適応するのが結構、大変でした。

法3年：能動、受動という言葉が出ましたが、私も、大学は主体性が磨かれる環境なのかなと感じています。さきほどの生成AIの話でも、使っている人と使っていない人がいて、そのような学び方も含め、自由であると思っています。飛び込みさえすれば、自分が学びたいものを学べる環境があふれている場所であり、その意味で、自己責任という面もあると思います。AIを使う場合も、AIに関するどの情報を正しいと認識しどのように使うかをある程度自分で判断しなくてはならない。その責

任感も、大学でAIを活用する中で身に付いたところだと感じています。

理4年：正解を求めるか、発見を求めるかに違いがあるかなと思っています。

名倉：本日の座談会では、ICTツールや生成AI、就職活動の早期化など変化する学修環境のなかで、皆さんが大学でどのような学びの経験を積んでいるかを伺うことができました。ありがとうございました。

※本特集で取り上げた内容は、学生の実態を代表するものでも、ICTツールや生成AI利用に対する特定の方針や態度を推奨するものでもありません。本学における学生の学びの状況の一例としてお読みください。

座談会まとめ：助教 名倉早都季

新・副センター長あいさつ

当センターでは2025年4月に副センター長が交代しました。以下に、新・副センター長からのメッセージをお届けします。

副センター長・教学IR (Institutional & Research) 部会長

木村 忠正 (社会学部教授)



※イラストはChatGPT-4oを利用して描画

このたび、大学教育開発・支援センターにおいて、副センター長・教学IR部会長を務めることになりました。教学IR部会は、授業評価アンケートや各種学生調査、履修データなどの集計・分析を通じて、大学教育の質保証と改善に資する情報を可視化・共有する役割を担っています。

2020年代、高等教育は、生成AIをはじめとする技術的革新と人口動態などの社会的変化という課題に直面していると感じます。ただ、社会がどのように変容しても、「学び」こそが教育の本質的価値です。センター、部会のミッションは、「学生の『学び』がどれだけ深まり、自らの成長を実感し、そう

した学生の『学び』、成長に、教員・大学がどのように寄与しているか。それをデータとテクノロジーを活用、可視化して、より良い『学び』に活かしていくこと」だと認識しています。

ここで重要なのは、こうしたミッションは、大学コミュニティを構成する学生、教職員の皆さんが、その価値を共有していなければ絵に描いた餅に過ぎないということです。センターはその活動を介して、大学コミュニティにこうした価値を文化として醸成するハブとなる役割も果たす必要があると考えます。

小職は、30年となる大学教員歴で、私立、公立、国立を経験し、2015年度から立教大学に奉職していますが、立教ほど、こうした文化が醸成されるのに適したコミュニティはないというのが率直な実感です。微力ではございますが、学生の皆さん、教職員の皆さんと一緒に知恵を出し合い、よりよい学びを追求するコミュニティ文化の醸成に貢献できればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

編

集

後

記

今号では、変容する学修環境と立教生の学びをテーマに学生座談会を開催しました。生成AIが大学での学修のあり方を変えつつある中、「自分の頭で考える」「自分の言葉で表現する」とは具体的に何を意味するのか、それができるとは一体いかなることか、という問いに正面から取り組むべきときが来ていると感じます。本記事が大学教育における生成AIの位置づけを考える一助となれば幸いです。当センターでは今後も大学教育に影響を与える社会・技術の動向を追い、大学教育が変わるべきところ・守るべきものを、教員のみならずとともに考える機会を提供できますよう、努めてまいります。(名倉)

「MOVE 第34号」

立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会 ニュースレター
2025年9月26日発行

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター TL部会
〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel: 03-3985-4624 Fax: 03-3985-4615
E-mail: cdshe@rikkyo.ac.jp

<https://www.rikkyo.ac.jp/about/activities/fd/cdshe.html>

